

G9999999

ヘッダは1ページ目のみ記入

投稿論文作成について*

(日本機械学会指定テンプレートファイル利用について)

講演番号 (Arial, 18pt)
プログラムでご確認下さい。
受付番号ではありません。

機械 太郎^{*1}, 技術 さくら^{*2}

Making Research Paper (About the Use of the JSME Specification Template File)

Taroh KIKAI^{*1} and Sakura GIJYUTSU

^{*1} Nihon Kikai Univ. Dept. of Mechanical Engineering
Shinanomachi 35, Shinjyuku-ku, Tokyo, 160-0016 Japan

When preparing the manuscript, read and observe carefully this sample as well as the instruction manual for the manuscript of the Transaction of Japan Society of Mechanical Engineers. This sample was prepared using MS-word.

英文アブストラクトも必ずご作成下さい

キーワードも必ず記入

Key Words : Mechanical Engineering, Keywords List

1. 緒 言

このテンプレートファイルは、日本機械学会論文集執筆要綱にのっとり原稿体裁を整えて投稿することができるようにスタイルファイルとして、フォントサイズなどの書式を設定し、登録している。1行の文字数、1ページの行数など定められた形式で作成することができる。

本文の文字数は、1ページ当たり、50文字×46行×1段組で2300字とする。また、文章の区切りには全角の読点「、」（カンマ）と句点「。」（ピリオド）を用いる。カッコも全角入力する。

本文中の文字の書式は、明朝体・Serif系（Century, Times New Roman など）を利用し、章節項については、ゴシック体を使用する。文字の大きさ及びフォントの詳細を確認する場合は、執筆要綱C.執筆要綱3・10節を参照する。

2011年度年次大会講演論文原稿では、PDF化した提出原稿のファイルサイズを、1ファイルあたり2MB以下とします。

2. このテンプレートファイルの使い方

このテンプレートの表題（副題）、著者名、本文などはあらかじめ本会指定のフォントサイズなどの書式が設定されている。この書式を崩さずに入力すれば、文字数、行数など定められた体裁で論文を作成することができる。しかし、絶対的な出来上がりのレベルを保証するものではないので、体裁が望むレベルに達しない場合には、使用の環境に合わせ、投稿者各自において微調整を行うなど、本会の論文集掲載の体裁に最も近い設定を行う必要がある。

^{*1} 正員, 日本機械大学 (〒160-0016 東京都新宿区信濃町 35)

^{*2} 学生員, 日本機械大学 工学部
E-mail: taro@jsme.or.jp

フッタは1ページ目のみ記入

なお、書式を崩してしまった場合は、段落内にカーソルを置き、[書式設定] ツールバーの「スタイル」ボックス

Table 1 Specified number of pages

Paper for submission	Original Paper	Review	Essay	Note	Translated Paper
Specified number of pages	10Pages	10Pages	5Pages	5Pages	10Pages

スで、指定したいスタイルをクリックすると体裁を容易に整えることができる。

3. 原稿執筆の手引き

3・1 原稿の規定ページ数について

論文集に掲載される原稿 1 編当たりのページ数は、原則として表 1 のとおり規定ページ数に従う。

- (1) 原著論文、研究展望は、最大 6 ページまで超過を認める。校閲の結果により、編修委員が特に必要と認めた原稿については、更に超過を認めることがある。
- (2) 研究随想は、校閲の結果により、編修委員が特に必要と認めた原稿については超過を認めることがある。
- (3) 再録論文は、最大 6 ページまで超過を認める。なお、編修委員長が特に必要と認めた原稿については、更に超過を認めることがある。(執筆要綱 B.投稿規程 2・1 (注)「例外規定」(2))
- (4) 2011 年度年次大会講演論文原稿のページ数は、2~3 ページを標準としますが、最大で 5 ページまで可とします。なお、原稿中にページ番号は不要です。

3・2 原稿の作成に際して

原稿の冒頭には、和文の表題・副題、著者名、英文の表題・副題、ローマ字著者名、ローマ字連絡先所属機関を入れる。

3・3 表題及び副題の付け方

原稿の表題は内容を明確に表現するもので、しかも簡潔なものが望まれる。また、必要に応じて副題を付けてもよいが、第 1 報、第 2 報という表現は極力避けるようにする。

3・4 英文抄録の書き方

英文アブストラクトも必ずご作成下さい。

長さは 150~250 語程度で、途中で改行をしないで、本文と切り離してそれだけを読んでも、論文の内容が具体的に分かるように研究対象、研究方法・装置、結果について書く。また、本文中の図・表・文献は、引用しない。式を書く必要がある場合は、式の番号を引用せずに、式をそのまま書く。

3・5 キーワードの付け方

キーワードは、論文の内容を代表する重要な用語で、選定に際しては、基準キーワード集の選定要領に従い選ぶ。

2011 年度年次大会講演論文原稿では不要

3・6 脚注の書き方

原稿用紙 1 ページ下に本文との間に線を入れ、~~原稿受付年月日(投稿時は空白)~~、著者全員の会員資格、著者の所属機関名、所属機関所在地、代表著者 1 名の E-mail アドレスを書く。著者の所属機関名については、当該研究が行われた時点での所属機関名・部署名等を記載する。研究を行った後に著者の所属機関に変更があった場合は、投稿時の機関名を記入し、現所属についてはカッコ書きにて(現〇〇)のように、必要に応じて記載することもできる。

3・7 見出し(章、節、項)の付け方及び書き方

$$d \left\{ \sum \frac{1}{2} mk \left[\left(\frac{dxi}{dt} \right)^2 + \left(\frac{dyi}{dt} \right)^2 + \left(\frac{dzi}{dt} \right)^2 \right] \right\} = \sum (Xidxi + Yidy + Zidzi) \quad (1)$$

式番号は、式と同じ行に右寄せして（ ）の中に書く。また、本文で式を引用するときは、式（1）のように書く。式を書くときは、2文字分空白を空ける。また、必要行数分を必ず使うようにして書く。3行必要とする式を2行につめて書いたり、2行に分かれる式を1行に収めたりしない。なお、本文と式、式相互間は1行以上の空白を空けて、見やすくする。

また、原則として数式エディタのポイント数は本文に準じるものとするが、添え字等が小さく読みにくくなるときは適宜拡大する。

$$\bar{C}(t) = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^N C_i(t) \quad (2)$$

$$C_{th} = \frac{\sum_{i=1}^N C(t)}{\sqrt{\sum_{i=0}^N (l_0 - l_i)}} = \frac{b}{a} C_0 \quad (3)$$

$$W_{th} = Q_1 \frac{\Delta T_0}{T_0 + \Delta T_0} = Q_2 \frac{2\Delta T_0}{T_0 + 2\Delta T_0} = Q_2 \frac{3\Delta T_0}{T_0 + 3\Delta T_0} = GL_0 \frac{\Delta T_0}{T_0} \frac{T_0 + \Delta T_0}{T_0} \left\{ \alpha^* - \frac{C_p \Delta T_0}{L_0} \left(\frac{T_0}{T_0 + \Delta T_0} \right)^2 \right\} \quad (4)$$

6. 引用文献の書き方

本文中の引用箇所には、右肩に小括弧をつけて、通し番号を付ける。例えば、新宿・渋谷⁽¹⁾⁽²⁾のようにする。引用文献は、本文末尾に番号順にまとめて書く。また、日本語の文献を引用する場合は日本語表記とし、英語の文献を引用する場合は英語表記とする。引用文献の書き方の詳細については、執筆要綱を確認すること。

7. 結 語

本テンプレートファイルのスタイルを利用すると、各々の項目の書式が自動的に利用できるのもので便利である。

文 献

- (1) 新宿太郎, 渋谷二郎, “論文の書き方”, 日本機械学会論文集 A 編, Vol. 52, No. 485 (1987), pp. 111-116.
- (2) Keer, L.M., Knapp, W., and Hocken, R., “Resonance Effects for a Crack Near a Free Surface”, *Transactions of the ASME, Journal of Applied Mechanics*, Vol. 51, No. 1 (1986), pp. 65-69.